

クラシック音楽で東京の学校へ

大塚化学株式会社 特別相談役
大塚国際美術館 理事
大塚 雄二郎



東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について語っていただく本連載。第9回は、10年にわたり東京フィルの理事をつとめられ、様々な角度から東京フィルをご支援くださっている大塚化学株式会社 特別相談役の大塚雄二郎様に、音楽と出会った故郷“鳴門”でのエピソードを綴っていただきました。

私は高校まで徳島の鳴門で育ちました。鳴門は瀬戸内海と太平洋の境目にあり、渦潮で有名です。橋からも船からも、渦の時間に合わせれば素晴らしい自然が楽しめ、世界で一番の景観です。その風景が見える場所に私が理事をつとめる大塚国際美術館があります。世界でただ一つの陶板美術館で、見応えがあります。

もう一つ鳴門で忘れてならないのはベートーヴェン『第九』の故郷ということです。大正時代のはじめ、中国は青島で俘虜となったドイツ兵のうち約1,000名が鳴門市の板東俘虜収容所に収容されました。収容所の松江所長はドイツ兵たちと当時では考えられなかったほど優しく接し、自主性を尊重し兵たちの中にいた音楽隊や演劇・スポーツなども自主的にやらせ応援しました。町民たちも松江所長と共にドイツ兵たちと接し文化を吸収して馴染んでいきました。ドイツ兵たちは楽器も手造りし、町民たちも手伝って協力しました。音楽もたくさん曲目はあったのですが『第九』が一番得意だったようです。合唱は女性がいなかったため最初の頃は男性だけが歌っていたようです。私の2歳下だった鳴門の市長さんは、広報のために札幌やらほうぼう

アジアで初めてベートーヴェン『第九』が演奏された鳴門での一枚



へ第九を歌いに行っていました。

私は中学生の頃から東京の大学をめざして勉強をしておりました。音楽を聴きながら。SP、EP、LPレコードの時代です。勉強の友はやはりクラシック音楽がいいですね。気が散らないです。『ピーターと狼』やベートーヴェンの「ロマンス」2曲が好きで、四国放送のラジオのクラシック番組にリクエストして勉強しながらよく聴いておりました。今でも大好きです。不思議なもので、音楽というのは聴けば聴くほど、馴染めば馴染むほどもっと聴きたくなる。私の親父がいつも言っていました。世の中は“もう一ぺん”が一番大事だ、と。「もう一ぺん会いたい」「もう一ぺん食べたい」「もう一ぺん行ってみたい」「もう一ぺん聴いてみたい」本当ですよ。もう一ぺん、を繰り返し、クラシック音楽を聴きながら憧れの東京の大学に来ることができました。

今から40年ほど前になりますが、大不況があり世の中が暗くなりました。その頃、私のところに学校の先輩で当時の東京フィルの事務局長さんがお見えになって、この不況でスポンサーは離れていくし、楽団員たちも困ると伺いました。

そんなことで、以来時々東京フィルのコンサートで文化を楽しませて頂いております。先日サントリーホールで服部百音さんのヴァイオリンを聴かせて頂いて感動し、こんな素敵なお方の追っかけになれば楽しいだろうなど思いました。

大塚雄二郎(おおつか・ゆうじろう)
昭和39年慶應義塾大学卒。大塚化学株式会社 特別相談役。大塚国際美術館 理事。
2011(平成23)年より公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 理事。

大塚化学株式会社様は、素材を核とし、常に技術革新し豊かな暮らしを社会にもたらす製品づくりを目指しています。ヒドラジン事業、無機素材・複合材事業、医薬品原薬・中間体事業を中心とし「自動車」「電気・電子」「住宅」「医療」分野へグローバルに製品を提供しています。